みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モノの崇拝の現在：機関研究：「マテリアリティの人間学」領域　モノの崇拝：所有・収集・表象研究の新展開 （2009-2012）

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹沢, 尚一郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4918

PROJECT

モノの崇拝の現在

文・写真
竹沢尚一郎

機関研究 ●「マテリアリティの人間学」領域
モノの崇拝：所有・収集・表象研究の新展開（2009-2012）

機関研究「マテリアリティの人間学」は、人類学と民族学博物館の主要な研究分野のひとつである物質文化研究の現代版といってよい。これまでの研究の流れにおいて、私たちの研究プロジェクトはどのように位置づけられるのか。簡単に整理しておこう。

民族学博物館にせよ人類学にせよ、その誕生は「博物館の世紀」と呼ばれた19世紀の半ばである。ときは西洋の拡張と進化論的思考の最盛期であり、世界にあるすべての存在と事物を所有し、認識し、その頂点に人間、とりわけ西欧人を位置づけることこそ、これらの営為がめざしたものであった。そのとき、さまざまな人間集団が世界の各地で作り出していたモノは、人類の進化をなによりも雄弁に物語る「実証的」資料とみなされ、博物館に序列づけて陳列されたのである。

当時の物質文化研究がこのような背景からなされていたとすれば、モノに対する視点がいかなるものであったかは明らかだろう。モノはあくまで、神に代わって存在の連鎖の頂点にのぼりつめた人間が作り出した被造物にすぎないとされ、客観的な手法によって（とはすなわち、主体としての人間から切り離し可能な物体として）分析可能だと信じられていたのである。

1990年頃を境として、モノ研究は新たな段階を迎える。「マテリアリティ」などの名を冠したその潮流はロンドン大学等を中心に生じたものであり、モノを人間から分離可能な客体としてとらえるのを止め（それゆえモノの比較や分類は放棄される）、モノと人間の相互作用を考えること、さらにいえばモノそれ自体を固有の力能をもつエージェンシーとしてとらえ、そこからモノと人間とが作り上げる世界をとらえ返そうとするものであった。

私たちの「モノの崇拝：所有・収集・表象研究の新展開」プロジェクトが出発するのも、こうした視点の変換からである。この視点の変換が何をもたらしうるか、以下に素描しよう。



国際的なアーチスト、エル・アナツイの作品世界をめぐっておこなわれた国際シンポジウム。

「モノ」化の装置としてのミュージアム

まず、ミュージアム（博物館・美術館）についての新たな理解である。ミュージアムの誕生は、フランス革命によって用済みになったパリの王宮ルーブルの転用にあったというのが通説である。身分制や宗教の支配を転覆させた革命政府は、貴族や教会から没収した一連のモノを国民国家の管理下に置き、「美術品」としてルーブルその他に陳列した。それらのモノは、フランス国民の美的才能を示す美術品として、あるいはフランス革命軍の力量を示すモノとして、国民に向けて展示されたのである。

ここに、モノに対するいかなる視線の変化があったかは明らかだろう。それまで私的に所有されていたモノは、以降、公共のものとされた（国民のものとされた）だけでなく、教会のミサや家族のような私的集団の儀式から切り離されることで、操作可能・分析可能な対象として「美術史」の枠の中に押し込められた。ここにおいてミュージアムは、ポミアンがいうように国民創出のためのカルトの場であるだけでなく、モノと人間が切り結んでいた関係性を断ち切り、モノを人間が自

由に操作できる対象に貶めるための装置となったのである。

一方、ミュージアムには別の機能もある。評価の場としてのそれである。ある無名のアーチストの作品が著名なミュージアムに入れられるや、価格が一桁、ときに二桁上がることはよく知られている。モノ一般を客体の地位に貶めると同時に、一部のものに対して法外な価値を与え、それへの崇拝感情を掻き立てること。このように、一方でモノの脱コンテクスト化＝商品化をおこない、他方でその評価を通じてモノの崇拝対象への変換をおこなう点にこそ、ミュージアムの最大の機能があるであろう。実際、歴史博物館についていえば、近代の制度としての国民国家とその歴史を称揚するためにモノをうやうやしく陳列する場であるし、民族学博物館とは元来、国民国家の支配能力を目に見えるかたちで示すための施設であった。

このように、すぐれて近代的な装置としてのミュージアムは、他の近代の装置（学校、工場、病院、娯楽産業等）といかなる関係にあったのか。近代が必要としたミュージアムは、ポストモダンと呼ばれる今日、その歴史的使命を終えたのか。その一方で、今日世界の各地でミュージアムがあいついで建設されているという実態をどう解釈すればよいのか。ミュージアムが人間によるモノの支配に寄与したとすれば、モノと人間との相互作用を可能にする展示はどのようにして可能になるのか。これらの問いを歴史的かつ通文化的に考えることが、本研究プロジェクトの主要な課題である。

モノがつくる記憶

以上の研究テーマがモノをめぐる制度に向かうとすれば、本研究の第2の主題は主として人間の意識を対象とするものである。考えてみよう。私たちの意識の多くは過去の記憶と未来への投企からなっているが、そこに人間を含めたモノの存在しない局面は存在するだろうか。悔恨に満ちた過去の記憶と、歯ぎしりするようなモノへの渇望、そして未来への憧憬。私たちの意識のなかにあるのはさまざまなモノのイメージであり、とすれば意識とりわけ記憶とはモノとの関係において成立するものではないか。

フランスの民族学者にして詩人であったミシェル・レリスは、少年期に形づくられて意識を支配していたモノの記憶を一つ一つ数え上げ、それを「日常生活のなかの聖なるもの」と呼んでいる。そのような「聖なるもの」のうちに、家族写真や結婚指輪、愛玩品や、いくつかの贈り物を含めることができるだろう。独特の磁場によって人間の意識の極を形づくっているそれらのモノが失われたなら、あなたはどれだけ嘆くことか。

このようにしてモノと意識の関係を問う本研究は、モノが可能にする集合的記憶の領域へと踏み込んでいく。人びとが共有する記憶に、モノはどのようにして関係しているのか。もし、津波や大地震のような大災害によってモノを喪失させられた人びとの記憶は、何によって語ることができるのか。大量殺人によって破壊され、生活の根拠を根扱ぎにされた人びとの記憶は、どのようにして再現可能なのか。大量殺りくと大災害がくり返し人びとを襲う今日の世界で、モノを通じての記憶と語りのあり方を問いなおすことは、人類学の主要な課題の一つではないか。



崇拝すべきモノを求めて骨董市は大繁盛。

モノと「私」の関係

さらに、モノについて問うことは、モノとしての身体の固有性に関わる問いを立てることでもある。現代におけるモノとは、以上の検討から客体化可能であり、代替可能な事物として位置づけられる。このとき、その対極に位置するのは唯一無二としての「私」であろう。しかし、タトゥーや整形、臓器移植等による身体の加工が日常化した今日、「私」の観念は以前のままなのか。もし身体が代替可能なモノに過ぎないとすれば、それに結びつけて考えられてきた「私」や「精神」もまた固有性を失い、代替可能なモノでしかなくなっているのか。このように、モノと人間との関係性を問うていくと、「私」とは何か、「私」に固有なモノとは何か、という問いに行きつく。今日の文化的特徴のひとつである「私」の崇拝も、あるいはモノ崇拝の一形態にすぎないのかもしれない。

本研究はこれから3年の時間をかけて、以上の3つの課題を問い直そうとするものである。モノと人間の関係という切り口から、現代世界を構成しているさまざまな制度や、そこに生きる私たち自身を問い直すこと。それが本研究の志向するものである。このようなパースペクティブから、2009年にはフランスの世界的な人類学者モーリス・ゴドリエ氏らとともに国際シンポジウムを開催した。2010年には、6月にジェームズ・クリフォード氏を囲んで国際シンポジウムを開催したほか、10月には、アフリカのみならず、現代世界を代表するアーチスト、エル・アナツイ氏の特別展示の開催にあわせて国際シンポジウムを開催した。アートを美術史の枠のなかにはめ込んで、そのスタイルや技法を考察するというのではない。アートは人間に何をもたらしうるのか。アートをミュージアムに押し込み、その周囲に美術史や民族学を配置してきた知の制度を、どうすれば掘り崩すことができるのか。そうした問いを、エル・アナツイの作品世界から出発することで問い直したい。

たけざわ しょういちろう

先端人類科学研究部教授。専門はアフリカ史、人類学学説史。著書に『人類学的思考の歴史』（世界思想社 2007年）、『サバンナの河の民：記憶と語りのエスノグラフィ』（世界思想社 2008年）など。